夕焼け通信 1361号　2022.7.18
〒690-0823　島根県松江市西川津町4276-B402　gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/　編集 宮森健次

専業ババ奮闘記（その２）107

木幡智恵美

二人暮らし（4）

降り続いた雨は収まり、日曜日にはお日様が顔を出した。寛大の忘れ物を届けにボルティで玉湯に寄ると、娘がトイレに入っていて、宗矢は忠ちゃんに抱かれて泣いていた。まだ本調子ではないのだろう。「調子が戻らなかったら、月曜日預かるから」と言って、ボルティで農道を西へ走り、来待からは九号線に入って家に帰った。

翌月曜日の朝、宗矢の心配をしていると、「大丈夫そうだから保育園に連れて行く」と娘から連絡が入る。週末来た際には、すっかり元気になって、家じゅうを動き回っていた。

点訳をしたり、畑に行ったり、二人の暮らしにも大分慣れた頃、寛大と実歩二人で我が家に泊まる日がやってきた。一学期終業式の日だ。二人が泊まるのは、宗矢が産まれて母子が里帰りして以来だから、一年半ぶりだ。夜のご飯は何にしよう、デザートはとあれこれ考えて材料の買い出しに行き、ついでに花火も買っておいた。

お泊りの日、早朝から出雲に向かい、水やりと草刈りをする。その日の最高気温は三十五度、全身汗まみれ。シャワーをし、帰りに玉湯学園に寄って寛大を連れて帰った。昼食後、宿題を済ませてからは、トランプをしたり、テレビを見たり。夕方実歩を迎えると、四人でトランプをし、夕食。見た目に良いと思って作ったカラフルいなりだったが、実歩はちょっと苦手のようで、オードブルをあれこれつまんでいた。デザートはアンニンプリン。

夕食後は、二人とも楽しみにしていた花火だ。寛大は、蝋燭に花火の先をかざし、炎が上がるのを楽しんでいたが、実歩は怖がって、見るだけ。線香花火さえ持てなかった。

翌日、二人とも五時半起き。実歩は前々からやりたがっていた絵の具でのペインティング、寛大は段ボールで銃作り。その後、サンドイッチを持って、原子力館に行ったが、コロナ禍で飲食禁止ということで、ひとしきり遊んでから家に帰って昼食にした。夕方娘が迎えに来るまで、カードゲームやテレビを見て過ごす。宗矢は、少しでも遊びたかったのにすぐに車に連れ込まれ、泣いてしまった。退屈はしなかったけれど、少々疲れたかな。

息子がいよいよ明日帰ってくる。予定では七月末までということだったけれど、夏休みに入り、給食がなくなったので、ヘルプチームは解散らしい。さて、何を作って迎えようか。

宮森健次

草取り

毎日のように草取りに出向くことも、その労働の対価としてお金をいただくというのも、まったく初めての経験である。だからこれまで一度も考えたことがなかったようなことを考える。その一つ。自分の草取りは我流ではないかという疑いが生じた。これまで一度も草取りについて教えられたことがないし、三十八年間教員をしながら子どもたちに教えた記憶もない。だれもができて、違いは根気と体力だけ。

だが、明日も明後日も草取りとなると、もっと体に負担をかけないやり方があるのに、それを知らないだけではないかと気になってきた。長くても三時間までなので、途中伸びをしたり足腰を動かしたりすれば何のことはないのだが、無知ゆえの無駄な苦痛だったら悔しい。もしかすると今日日のこと、筋トレを兼ねる姿勢や運動があって、草取りと同時に体幹を鍛えられるなどと説く者もいるかもしれない。

肉体だけではない。精神についてもどこかに意義深い思索があるかもしれない。と言うのも、草取りをしていると、ただただその行為に没入して時が経つのを忘れている場合がある。昔、寿司屋でアルバイトをしていたとき、もっとも好きだったのは、魚の形をした醤油容器（金魚と呼んでいた記憶があるが、正確には鯛）に油差し様の容器から醤油を一つ一つ注入する仕事だった。異様に集中してくる感覚があって、自分に向いている仕事はこれではないか、と真剣に考えたものだった。醤油さしにしろ草取りにしろ、単純な反復の中で心が鎮まっていく過程は、山登りにも似る。ひょっとすると禅にも通じるのでは、と思うのだ。

草取りの道具や仕方そのものにももっと効率のよいものがあるのなら、自分だけでなく利用者にも益となるわけだから、ちょこっと就労の今後のためにも学んでおきたい。愛用のねじり鎌を超えるものがあれば喜んで買いもしよう。

いつものならいで、ひとまず書籍で調べようと図書館に赴いた。というか、他の本の貸借のついでに調べた。そんなもんあるわけないだろ、と高をくくっていたからだ。あった。『農家が教える草刈り草取りコツと裏技』『草取りにワザあり！』。ぴったりだ。こういう時だ、図書館の存在意義がいや増しに増すのは。

一方の草取り精神論については、書籍こそ見つからなかったがネットでは意外とヒットして、多くはお寺のご住職のブログに見ることができた。山寺の草取り、その労苦たるやぼくなぞ比較にならぬ。ここに信仰の出番がある。「動中の工夫は静中に勝ること百千億倍す」と白隠禅師の言葉を引いて草取りは禅に他ならずとしているご住職があった。作麼生。

ニュース日記　839

中村　礼治

55年体制の息の根を止めたか

30代フリーター　やあ、ジイさん。自民の大勝、維新の躍進、立憲の敗退となった参院選の結果をどう見る。

年金生活者　55年体制の息の根を止めた選挙としてのちに総括されるかもしれない。このシステムを担った一方の政党である旧社会党の流れをくむ立憲民主党が後退し、「野党第1党」は名ばかりになったからだ。

55年体制は憲法改正を阻んできたシステムだった。この体制下では、社会党が衆参両院の議席の3分の1を確保することで、改憲発議に必要な3分の2の議席を自民党に与えないようにすることができた。

今回の参院選の結果をめぐって、マスメディアは改憲4政党が3分の2の議席を維持したと報じている。それは裏を返せば、かつて自民党単独でなし得た3分の2の議席獲得が今は4政党が束にならないとできなくなったことを意味する。他方、野党はかつて社会党単独で獲得し得た3分の1の議席を1党では獲得できなくなったうえに、自民党以上に改憲に熱心な野党が出現した。

30代　そもそも55年体制なんてまだ残っていたのか。

年金　それが崩れ出したのは30年以上前の東西冷戦の終結にまでさかのぼる。55年体制下での自民党と社会党の対立はアメリカとソ連の対立のコピーだった。米ソが対立しつつ裏で手を握ったように、自社両党は表で立ち回りを演じながら、裏で妥協した。米ソがともに「大きな政府」路線をとったように、自社両党も大きさの程度が違うだけで、ともに「大きな政府路線」をとって高度経済成長をあと押しした。

当時の自民党を主導したのは保守本流と呼ばれる党内勢力だった。55年体制を崩す動きが強まったのは、本流でない小泉政権が誕生してからだ。冷戦の終結は日本では高度経済成長の終わりと重なった。それにともなって、小泉政権以降の政権は「小さな政府」路線を部分的にではあるが採り入れ始めた。自民党を倒して誕生した民主党政権も同様だった。

30代　参院選に勝利した岸田文雄は憲法改正について「できるだけ早く発議をし、国民投票に結びつけていく」と語っている。

年金　安倍晋三のように改憲を「悲願」とはしていない岸田はどこまで本気なのか疑問が残る。かつてない政治的なエネルギーを要する課題に取り組めば、自らの政権の維持を犠牲にしなければならない場面に遭遇する可能性が高まる。口では「改憲」を言いながら、先延ばしをする選択もあり得る。

仮に発議にこぎつけたとしても、自民党の改憲4項目の中でも難易度の高い9条の改正は国民投票で否決される可能性がある。9条に「自衛隊」を明記することは、それまであげていた白旗をおろし、代わりに軍旗をあげることを意味する。「平和ボケ」という希少な美点を持つ日本国民の過半がその緊張に耐えられるだろうか。

30代　参院選の終盤で首相経験者が街頭演説中に射殺される事件が起きた。決して深くはないけれど、影のように離れないこの寂寥感、喪失感はなんだろう。安倍晋三に好感を持ったことは一度もないのに、人の死は感情を一変させるのか。

年金　彼と対立した野党政治家たちが一斉にSNSで彼の死を悼む発信をしているのは、有権者の反感を買わないようにするための思惑からだけではないと思う。彼を嫌っていながら訃報を聞いたとたんに反発心を和らげた人たちは少なからずいたはずだ。死は人が人でなくなること、この世ならざら存在になること、神あるいはそれに近い存在になることとして多くの人たちに受け止められる。この世のものである反感や憎しみは行き場を失い、溶解する。私もそんなひとりだ。

30代　歴代首相には見られなかったような激しい「反安倍」の合唱はなぜ起きたのか。

年金　安保法制の強行をはじめとした強権的な政権運営が野党や左派、リベラル派の神経を逆なでしたからだ。

その政権運営の特徴をひと言で言えば、自民党と社会党が「共存」した55年体制の破壊を進めたことにある。55年体制は、社会全体がまだ貧しかった時代に適合したシステムだった。万年野党の社会党は、その社会の中のとりわけ貧しい層を代表した。その貧しさを埋め合わせるのが政治と考えていた自民党は、基本路線に軽武装と経済優先を選んだ。社会保障政策などをめぐる野党の要求をのみ、代わりに外交・安保などの重要法案をめぐって裏で野党に譲歩させた。

30代　今の自民党とはずいぶん違う。

年金　当時の自民党が野党の要求をのむことができたのは、日本の資本主義が高度経済成長期を迎えていたからだ。政府・与党は経済の牽引車となる第2次産業のインフラを整備するために、財政支出を惜しまなかった。それには税の増収という確実な見返りがあった。

それがすっかり過去のものとなった時代に政権を担うことになった安倍晋三は「戦後レジーム」、すなわち55年体制からの脱却を目指した。「闘う政治家」を自認していた彼は「妥協」ではなく「対決」を、「軽武装」ではなく「重武装」を目指した。旧社会党の流れをくむ左派、リベラル派は「話が違うじゃないか」と怒り、「アベ政治を許さない」となった。